

【無料配布】短編ミステリ

怪盗という職業

Kan

真冬の山荘に泊まり込んでいる、お互い、名も知らぬ間柄の人々。吹雪が止むまであと何日かかるか分からない。大鍋で作った醤油ラーメンを啜りながら、百物語の代わりに、馬鹿らしい失敗談をひとつずつ順番にしようということになった。ずっと部屋の隅に座っていた、ひとりの老人が語り出したのはこんな話だった。

＊

怪盗という職業は、今じゃだいぶ時代遅れのものとなつたらしいですな。世間じゃ、怪盗紳士ルパンも怪人二十面相も、もう流行っちゃいないし、ミステリ小説の評論なんぞ読みや、リアリティ、リアリティの大合唱ですから、当然の如く、怪盗を生業とする人間はひとり、またひとり減ってゆきました。

そんな中、わたしはたったひとり、古風な怪盗の稼業を続けていたのです。丁寧に予告状をこしらえるなんて、今の世の人にや笑われてもしようがないことでしょうけど、わたしは毎回ちゃんと送っていましたよ。

そんなわたしがある日、ぱったりと怪盗稼業をやめる気になった、そのわけを今からお話ししましょう。

……あれは決して忘れることのできない、二十年前のクリスマスイブのことでした。わたしは送った予告状通りに、都内の某博物館から、仏像を盗んできたのです。

仏像を盗む時、この博物館に勤める学芸員の姿が見えました。ニヤリと微笑んでいるのが、どうも不自然な気がしたのです。

しかしね、その仏像、倉庫に入れてみると、どうも表面がブヨブヨしておかしい。あれ、変だなんて、触っていたら、くにやりと曲がって、倒れてしまった。も

しや、これ、人間じゃないかしら……。

「あつ、これは人間の死体……。男の死体を金箔で塗装して、仏像の形に仕立てたものだ。死後硬直しているからまったく気が付かなかった……！」

そう、わたしは叫びました。

仏像と間違えて男の死体を盗んでしまった、なんて理屈に合いません。してみると、あの仏像を管理していた博物館の学芸員こそ、この男を殺した、残虐な殺人犯なのだと思います。きつと、わたしの予告状が届くやいなや、ここぞとばかりに、以前から恨みのあったこの男を殺害し、金色の仏像に仕立て上げたのでしょうか。

その死体を、怪盗であるわたしに盗ませることによって、死体もろとも自分の犯罪を丸ごと隠滅しようとしているのでしょうか。そして本物の仏像については「怪盗に盗まれた！」などと周囲にいつて、その実、自分のものとして頂戴してしまおうという寸法に違いありません。

わたしはそう思いました。

「なんという残酷極まりない悪党だ……」

わたしはそう思うと、居ても立っても居られなくなりました。わたしは怪盗とはいえ紳士でありましたから、重要文化財の窃盗はしても、人殺しは絶対にしない、そういうポリシーを持っていたのです。わたしは昔から曲がったことが大嫌いでした。予告状まで作っているのですからお分かりになるでしょう。人殺しを野放しにしてはいけないという義憤に燃えたのです。

それにもしかしたら、あの学芸員はわたしを、人殺しだ、と世間に嘘を吹聴するものかもしれない。そんなことになりや、今まで時代遅れの怪盗稼業に誇りをもって専念してきたのに、すべては水の泡です……。わたしの不安は募りました。

「よし、こうなったら、交番だ。わたしは交番にゆくぞ……！」

殺人犯であるあの学芸員は、わたしのこうした性格が見抜けなかったものらしい。わたしは、仏像の如く彩色された死体を、自宅の軽トラックにぼんと乗せると、そのまま交番に直行しました。そして警官に、自分が怪盗であり、盗み出した仏像が男の死体であったことなど、事情をすべて話しました。交番のお巡りは、満面の笑顔で「はいはい」と頷くと「いや、実のところ、あなたをお待ちしておりました」といつて、お茶を出しました。その裏で、刑事たちに連絡していたのです。それで、わたしは呆気なく刑事たちに囲まれてしまいました。

「ははは、罠にかかったな、怪盗！」

馴染みの刑事が、酷い顔して、笑い声を張り上げました。

「俺のことなどかまわぬ。それよりも、あの残酷な人殺しの学芸員を即刻、捕まえるのだ……。あのような人殺しを野放しにしておけば、社会の秩序が乱れてしまうぞ！」

「馬鹿め。まだわからぬのか。あの男の死体は、お前を誘い出すために、我々がこしらえた罠なのだ！」

「警察官であるお前たちがあの死体を？ そんなことをしているのか!？」

「アレはもともと拘置所にいる死刑囚だったのさ！」

この時ほど、わたしが仰天したことはありません。どうやら、正義漢であるわたしの性格を見抜いた上でのことだったらしい、と知って、「アア騙されたッ」と叫びました。刑事たちはフフッと笑ってわたしを捕まえようと飛びかかってきました。わたしは、発煙筒と警官の変装を駆使して、その場からなんとか逃げ出しましたが、怪盗ひとり逮捕するために、警察が平気で人を殺す世の中になったのかと愕然としました。わたしは、こんな世の中になっちゃ、怪盗紳士としてのスポーツマンシップなど到底、理解されることはないだろうと失念し、その日を境にして、すっかり足を洗うことを決断したというわけです。

これが、わたしが怪盗という稼業を辞めたわけです。昔流行った商売が廃れるというのは、なんともつらい話でして、このような社会の変化が原因なのです。最近、怪盗が減ったのも、こんな悲しい物語があるのでしょう。皆様、長い時間、私の空想話をお聞きいただきありがとうございました。

〈了〉

お読みいただきありがとうございます。「新生ミステリ研究会」所属のKanです名探偵羽黒祐介シリーズの「赤沼家の殺人」「カルマ・マンダラの殺人」というミステリ小説を販売しています。お気軽にお越しくださいませ。

